

## フランス服飾デザイナーの作品に就て

(C・ディオール, J・パトウ, H・ド・ジヴァンシー)

松村季三代

新着のモード雑誌を手にする度にその色彩感覚のすばらしさ、又シーズン毎に発表される各デザイナーの造形的な発展にいつも驚かされるのである。パリの服飾デザイナー達も元々コマージュリズムの上に立っていることは明らかであるが、各シーズン展開されるオリジナリティへの追求は模倣を許されないこの世界でいかにきびしいものであるかは想像に難くない。

今春被服科卒業の皆見和子、大畑博子の2人が卒論として数あるパリーのオート・クチュリエの中から、クリスチャン・ディオール、ジャン・パトウ、ウベール・ド・ジヴァンシーの3人を取り上げ、1956年春から1958年秋迄の2カ年半、フランス版ヴォーグとロフィシエルの両誌に発表された主なる作品を集成し、英語のトランスレーションとフランス語の説明文を解釈して3人の作風に就て彼女達自身の解釈と批判をしたのである。私は2人の努力の結果を借用し、集められた資料から3人のデザイナーの特徴をまとめてみた。C・ディオールは1957年秋に死去し、1958年春以後はその若い後継者サン・ローランの作品となるから作風は多少違ってくるが、他のデザイナーと比べた時、やはりディオール独特の感覚が流れているので区別しないことにした。集められた作品数は、ディオール100点、パトウ60点、ジヴァンシー45点で、その内訳はきものの種類を大別してイヴニング、カクテルドレス類がディオール33、パトウ24、ジヴァンシー21、日常着はディオール67、パトウ36、ジヴァンシー24となる。作品全部ではないから、正確な比率にはならないが多少共各デザイナーの個性とか、その片鱗はうかがえるかと思う。表Aは3人のデザイナーの使った主な色彩の合計である。

表A 3人の使った主な色彩 1956年春——1958年秋

デザイナー \ 色彩	黒	白	ブルー	赤	グレー	茶	紺	ベージュ	緑	モーブ	ピンク	黄	オレンジ	総数
C・ディオール	16	9	9	7	5	5	4	3	3	3	3	2	0	69
J・パトウ	13	5	4	4	3	1	1	5	2	1	0	4	3	46
H・ド・ジヴァンシー	8	10	8	2	4	3	0	5	4	2	2	1	0	49

黒白の写真だけで色彩についての説明がない時は何色と判明しないものが多数あるので色彩の総数が前記集められた作品数に満たないのは不明のものが残されているためである。ディオール、パトウの作品に黒が多く、ジヴァンシーは白がトップで同数の黒とブルーが2位になつている。ディオールは黒について白とブルーが多いが赤も他の2人に比して目立っている。ディオールの赤はどちらかといえば、青味を含んだものより黄味を帯びた赤が多かつた。グレーの数は3人共大して多くないが、実際には黒に近いチャコール・グレー系統はそれぞれ相当にあるのではないかと思う。紺はジヴァンシーになかつたがこれも1つや2つはあるかも知れない。

パトウは他に比べて黄、オレンジなどが目立ち、甘い色合のピンク、モーブ（うす紫、葵）が少い。濃い紫だけは3人とも一つも見つからなかつた。オレンジ色はディオールとジヴァンシーになかつた訳だがディオールには黄とオレンジの中間のような炒りとうもろこし色がある。之は黄の中に入れた。0の数字が絶対に皆無を示しているとはいえないし、作品数の多少で確言は出来ないが、ディオールは大体において何色でもこなしている。パトウとジヴァンシーには偏した好みがありそうな気がする。一口にブルーといつても爽やかなスカイ・ブルーから緑の入つたターコイズ・ブルー（トルコ石の青）紫のかゝつたアイリス・ブルー（花の名）とその色相は複雑である。昼間のきものは落ち着いた色調を夜のきものには華やかな色彩をと決つているのは当然であるけれども昼のきものにも赤や特にブルーの鮮明な色が見かけられるのは、この3人に限

表B デザインのモチーフ 1956年春——1958年秋

デザイナー \ デザインの要素	ボウ	ドレイプ	ポケット	ボタン	バックル	カット	ステッチ	ブレイド	バラ
C・ディオール	57	31	1	1	0	0	2	3	9
J・パトウ	16	10	15	14	0	10	10	3	1
H・ド・ジヴァンシー	16	6	2	4	8	3	9	0	0

つたことではなく、欧米人の眼の生理学的現象の結果かも知れない。

次に表Bは3人の使ったデザインのモチーフの統計である。これもイヴニングや、カクテル・ドレス類と日常着では、きものの性格が違ってくるからデザインの要素も異なるのが当然であるが、すべて一緒にまとめたので全般的な傾向として見てゆきたい。ボウ（蝶結び）の数は3人共最高を示しているが、ディオールのそれは圧倒的に多い。ディオールのボウの数がディオールのイヴニング類の点数より上廻っているのは彼がいかにボウを好んで用いるか、日常着のスーツ、コートに至るまでボウをうまく扱うのが解ると思う。同様にドレイプの数も多い。彼の整理された造型的なドレイプの技巧は重苦しくならず格調高いものである。ポケットがパトウに断然多いのは彼の日常着にスーツ類が沢山あるためであるが、彼のスーツや、ツーピースにはポケットがデザインのポイントとなつているものが多い。ディオールの服にポケットが見られないのではなく、ポケットを主題としたデザインのものが多いという事である。ディオールのスーツは何よりもシルエットに重点がおかれているようである。釦も又パトウの場合には普通の機能として扱わずにデザイン上の重要なアクセントとして用いている訳である。パトウは大抵ポケットと釦を組合せて使っている。その点数がほぼ同じなのはそれを示している。カット（切替）がパトウの服に多いのも目立つた特徴であり、とりわけ横の切替線を好んで使う。パトウはカットを強調するため更に太いステッチをかけたり、ブレイド（縁取り）を選ぶ。ディオールは一本の縫目にも細かい神経を使うが、縫目そのものをデザ

インの表面に押出してはいない。

カットを生かし、それを更に強調するパトウの作品は総じてスポーティな感覚を伴ってくる。他の2人になくてジヴァンシーに目立つのはバックル（ベルト等の留具）である。大きいバックルをデザインのモチーフとした作品がジヴァンシーには際立つて多い。バックルは機能美を端的に表現する。造花のバラはディオールのものである。彼の夜のきものにはボウとバラが巧みに組み合わせられている。表にあげなかつたがディオールはバラの外にスズランもよく使っている。ミュゲは亡きディオールの好きな花だつたから。こうして見ると3人のデザイナーの特徴が更に裏づけられて来るように思う。ディオールはそのエレガンスと高度な造型的手腕、パトウの最も西欧的な正統派の行き方、ジヴァンシーの大胆で若々しい近代的センス、それぞれに違つた個性と作風を持っている。

きものゝ構造は感覚によつてどのようにも変化させられるということを証明しているのがディオールである。戦後（1947年）ロングスカートを発表していわゆるニュールックなる言葉を風靡させ、その後Hライン、Aライン、Yライン etc, 最後となつた1957年秋のシャトル・ラインまで、従来のノーマルな女の身体を無視し、独特なシルウェットを創り上げたディオールは被服史に残るデザイナーであろう。上質の布地を使つてそれを更に裏打ちし、別に又増芯をするという技巧で特殊なシルウェットを構成する。ディオールに限らず、きものデザインが造型化するにつれて芯を増すことは近年常識にさえなつてきているが、ディオール程芯地を使う人も少いと思われる。技巧の上でディオールはこのような工夫をこらすと共に新しいシルウェットを出すためには思い切つて広い後巾、丸味のある肩や袖付といったように裁断法にも誇張が多い。スカートのヘムや袖口にも毛芯のような張りのある布地を入れ厚つぽくふっくらとした線を表現する。計算と技術でディオールはすべて柔かい丸味のある女らしさを現わしている。と共にフラット・ルックと呼ばれる胸を押しつぶした不健康ともいえる女性美はHライン（1954年秋）以後の彼の創作である。ディオール

ル二世のサン・ローランが先代の感覚を受けつぎ、その才一回作品トラペエズ・ライン(1958年春)は彼の世代を象徴するように若々しく成功裡に終つたが、その後目ざましい進展はないようである。今春のロング・ラインがどのようなものであるか「自然にかえれ」とか、流行が行きつく所まで行き、マンネリズムに陥る手前で清新な展開をしてほしい。

ジャン・パトウは戦後に名をなしたディオールよりずっと古く、才一次大戦後、既にパリで店を開いていた。現在の主任デザイナーはロラン・カルルといわれており、今のディオール店と同じくパトウその人ではない。が浮沈の多いパリの服飾界で連綿とその名を維持して来たことはジャン・パトウの持つ個性と行き方の結果であろうし後継者達の努力と手腕にもよるだろう。全体の雰囲気として新しさを出してはいるが、決してジヴァンシイのように前衛的なものを正面に振りかざしてはいない。又ディオールのように人間の身体をオブジェ風に変化させて扱っていない。極めて普通の洋服らしい洋服を創っている。だから最もヨーロッパ的な或はイギリス趣味ともいえる古典派なのだ。時代感覚は忘れずに平行させながら。パトウの作品は誰にでも理解し易い。一面非常にバタ臭いと私は思う。

ジヴァンシイの作品は故ディオールとは別な意味で巨匠の貫録を持つバランシアガに似通っている。バランシアガは寡作で商売気もないということであるから、モード誌に彼の作品を多く見かけることは出来ない。つぎつぎに新しいラインを発表することもなく独自の作風に一貫しているバランシアガに通じるものがあるジヴァンシイは若いだけに一層奇抜である。

昨年来、日本にも流行し、とやかくいわれたサック・ドレスもジヴァンシーは既に4年程前にそんなシルウェットを発表していた。大胆な構成、ちよっと考えられないシルウェットを創り出す。だから彼への賛否はジャーナリズムを沸かしたが彼につづいてサン・ローランや、ギ・ラロシュ、或はミシエル・ゴマといった若手選手が進出するに及んで、その才覚を生に発揮していたジヴァンシーもだんだん円熟の域に達したようである。最近のジヴァンシーは単純な

線の中にモダニズムをもり上げ、彼の地位を確保して来た感がある。パランシ  
アガは別格として、故ディオールには尊敬を、サン・ローランへは期待と関心、  
パトウの作品には信頼を、ジヴァンシーには魅力を感じている私は今後とも、  
それぞれのデザイナー達に学ぶ所が多いよう願っている。

(1959.3.12)